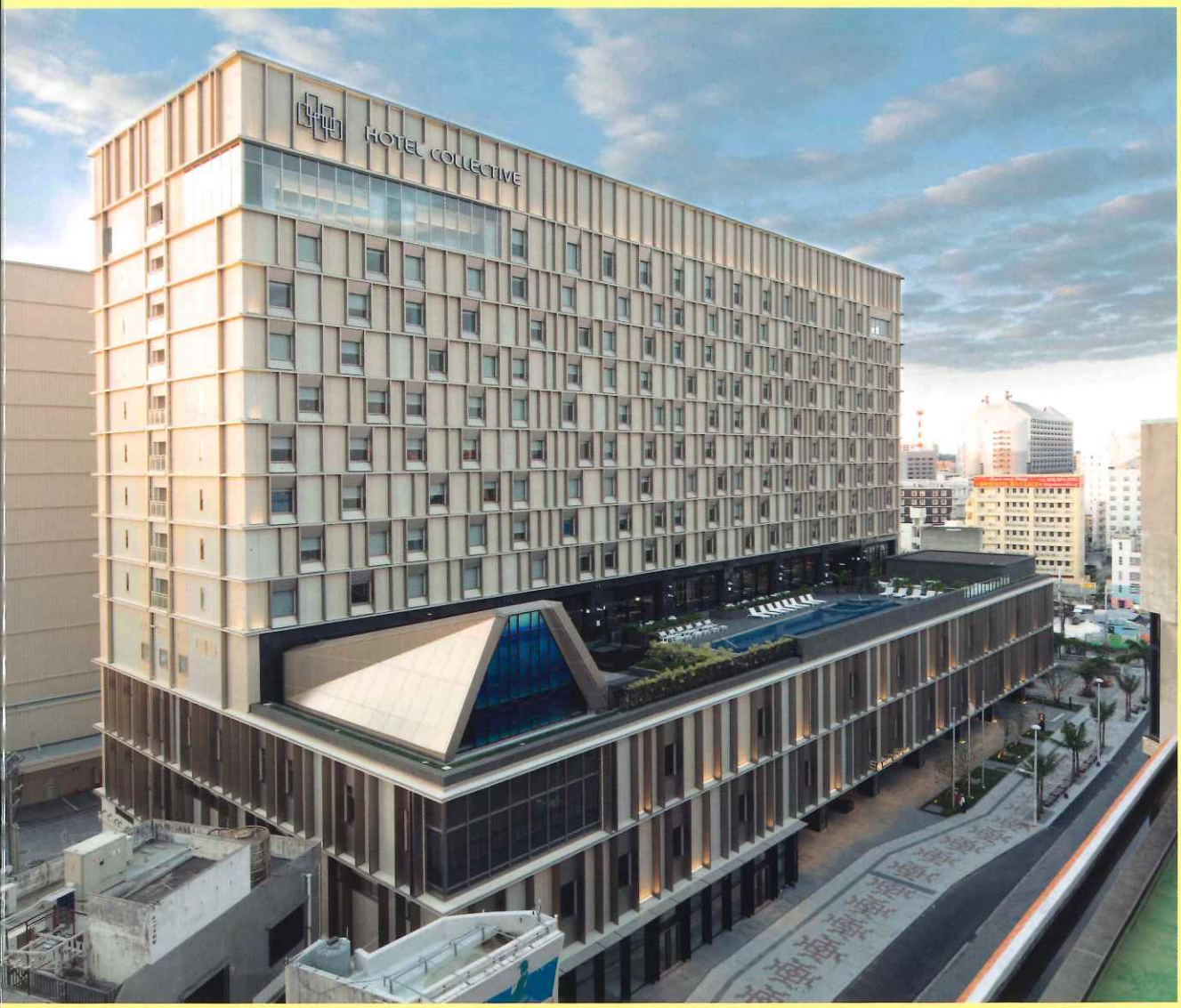
2020年（令和2年）5月5日発行（毎月1回5日発行）第51巻5号　通巻582号　ISSN 0289-3894

防水ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

5
2020
No.582



特集
- 塗り床の適材適所
- 外壁防水の将来性

特徴的な雨掛り建具枠の腐食

鈴木 哲夫

雨掛りに設置された鋼製建具は，枠回りなどに錆が現れるため，数年ごとに計画修繕で塗装を繰り返すのが一般的である。表面の錆発生に対応するために，塗装の塗替えが当たり前のようになっているのだが，果たして塗装だけ実施していればよいものなのだろうか。

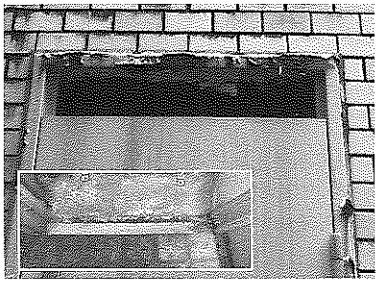


写真１　全体が雨掛り設置で枠の腐食が激しい建具

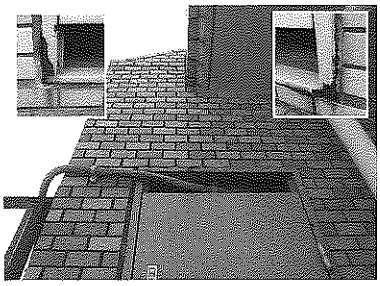


写真２　上部左約半分が雨掛り設置

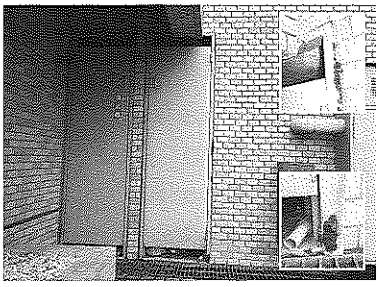


写真３　上部右の一部が雨掛り設置

写真１は，全体が雨掛りに設置された鋼製建具で，上部の枠の腐食が異様に激しく，ここまで腐食が進むと繰返し塗装の限界を越えている。**写真２**は，左側の一部が雨掛り設置の鋼製建具で，左側雨掛かり部の枠と枠下左右の腐食が進んでいる。また，**写真３**は，わずかだが右側の一部が雨掛り設置で，右側枠の腐食が認められた。

これらは，いずれも雨掛り部分を中心に特徴的な腐食が現れたケースだが，初期のうちに原因を潰しておけば，このような腐食は回避できるのではないか。

腐食の原因を分かりにくくしているのは，タイル張りである。建具枠とタイルの境目はシーリングされていても，下地モルタルとシーリングの間に水が差し込み，建具枠との間で止水できていないことが多い。タイル面からの止水はできても内側は無防備であり，**図**のようにタイル裏に潜った雨水が上部から流下して，建具枠にたどり着く。最終的には，枠の上部から縦枠に向かって流下し，枠の最下部で滞留するのである。

その結果，枠内部の雨水の滞留が起こる部分では，鉄部の内部からの腐食が進行する。したがって，枠内部に雨水が浸透する現象を回避しない限り，表面塗装の繰返しだけでは腐食劣化を止められないのである。

外壁がタイル張りの鋼製建具回りは，躯体との取合い納まりが見た目で判別しにくい。今回取り上げた写真のような腐食が初期にあるか，またはシーリングの膨潤劣化があれば，まず間違いなく建具枠内部に雨水が回っている。この場合，躯体と枠回り取合い部の止水処理が必要になる。

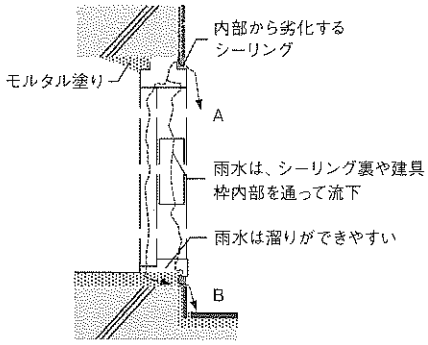


図　建具枠内部の雨水流下と滞留

鋼製建具回りは，枠内部に空洞があることが多いため，表面塗装だけでは不充分である。第１回目の修繕でこのような事象を認めた場合，塗装処理だけではなく，内部の隙間充填と鉄部の内部防錆処理を兼ねて，無機系の防錆剤入りグラウト材を注入したい。

(有)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役